

《茨城支部ニューズレター令和4年2月20日号》

2022年2月20日（日）、令和3年度第4回資格更新研修会（第3回公開講座）が行われました。今回もZoomによるオンライン研修会となりました。

1. テーマ 「発達障害の不安と向き合うための服薬と生活改善」  
講師：中山智博先生（茨城県立医療大学）

2. 参加者 88名（臨床発達心理士53名、一般35名）

3. 研修内容

DSM-5により発達障害（ASD／ADHD）の診断がつけやすくなった。一方、テレビやビデオの長時間視聴、睡眠リズムの乱れ、運動や遊びの経験不足等による一過性の症状が“診断”されてしまう恐れがある。

○「自閉症モデルマウスを用いた基礎実験」および「スラミンによる自閉スペクトラム症に対する治療」の紹介。  
→ ATPは不安を増強すると考えられる。ATPの働きをブロックする薬（ATP受容体拮抗薬／スラミン）を用いれば、ASD症状が改善される可能性がある。現在臨床研究中。スラミン治療に興味のある患者さんは「ASD治療薬を待望する親の会」[ria@mvh.biglobe.ne.jp](mailto:ria@mvh.biglobe.ne.jp)にご連絡ください。

○ ASD症状を「不安」に対する防御反応ととらえる。不安は単に心の問題ではなく、睡眠や自律神経などの身体状況とも密接に関連している。そこで、ASD症状を「神経の問題」と理解し、症状に応じた薬物療法が効果的である（生活改善や運動も並行して行う）。

○ 薬物療法の目的は不安を抑えることである。主に①睡眠障害に対する治療（2～3歳から開始：ロゼレム、メラトベル等）、②自律神経のバランスをとる治療（5～6歳から開始：インチュニブ）がある。この他、症状に合わせて漢方薬や向精神薬が用いられる。

○ 生活改善（環境調整）の目的も薬物療法同様、不安を抑えることである。具体的には、①規則正しい生活習慣、②テレビやYouTube等の視聴制限、③手のひら・足の裏を使う運動の推奨、④おもちゃは少なくする、等があげられる。

中山先生の講演後、質疑応答が行われました。その中で、テレビやYouTubeの視聴が子どもたちに与える影響を正しく認識し、その危険性を保護者らに伝えていく必要があるというご指摘がありました。今後の臨床に生かしていきたいと思っております。最後になりましたが、研修会の開催にあたりご尽力を賜りました皆様に、心から感謝申し上げます。

<次回資格更新研修会のお知らせ>

日時：2022年5月8日（日）13：00～16：00

開催形式：未定

テーマ：WISC-V知能検査の内容について（仮題）

講師：大六一志先生（日本臨床発達心理士会茨城支部支部長）

\*研修会終了後、2022年度総会を実施します。詳細は後日郵送するはがきをご覧ください。

（文責 中島 亜砂美）